ユネスコの世界文化遺産に指定されたベルリンのブルーノ・タウト設計による住宅団地

田中　辰明
お茶の水女子大学 名誉教授

柚本　玲
お茶の水女子大学 田中研究室

㈱工文社　月刊建築仕上技術　2008年12月号より

寄　稿

ユネスコの世界文化遺産に指定されたベルリンのブルーノ・タウト設計による住宅団地

お茶の水女子大学
名誉教授　田中 辰明

お茶の水女子大学
田中研究室　柚本　玲

はじめに

2008年7月にベルリン(Berlin)に建設された6つの住宅団地(Wohnungssiedlung)がユネスコの世界文化遺産に指定された。これらの名称、建設年、面積を表1に、ベルリンにおける所在を図1に示す。

筆者らはこれらの団地について2008年9月に調査を行なったので、その中からブルーノ・タウトが中心となって設計を行なった1、2、3、4の住宅団地について、タウトの設計した建物に関する報告を行う。

表1　ベルリンでユネスコ世界文化遺産に指定された住宅団地　(ha)

No	名称	訳	建設年	面積		
				住宅団地	緩衝帯	総面積
1	Gartenstadt Falkenberg	ファルケンベルクの庭園都市	1913～1916	4.40	6.70	11.10
2	Siedlung Schillerpark	シラー公園の住宅団地	1924～1930	4.60	31.90	36.50
3	Grosssiedlung Britz(Hufeisensiedlung)	ブリッツの大規模住宅団地(馬蹄形住宅団地)	1925～1930	37.10	73.10	110.20
4	Wohnstadt Carl Legien	カール・レギエンの住宅都市	1928～1930	8.40	25.50	33.90
5	Weisse Stadt	白色の町	1929～1931	14.30	41.10	55.40
6	Grosssiedlung Siemensstadt (Ringsiedlung)	ジーメンスシュタットの大規模住宅団地	1929～1934	19.30	46.70	66.00

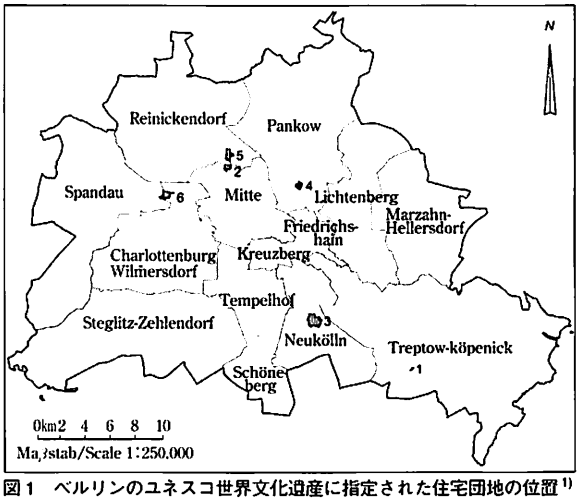

図1　ベルリンのユネスコ世界文化遺産に指定された住宅団地の位置[1)]

ブルーノ・タウト

ブルーノ・タウトは1880年、東プロシャの首都ケーニヒスベルク(Königsberg)で生まれた。建築を学び、ガラスの家(1914年)、鉄のモニュメント(1910年)等を発表し表現主義の建築家として認められる。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツは産業を振興し製品を輸出する事で賠償金を支払おうとするが、犠牲者は労働者であった。ベルリンの労働者の住宅は監獄のようであったとも言われている。タウトはこれではいけないと考え、労働者の健康を考えた集合住宅建設に傾注した。

1924年、44歳の時にベルリン市の住宅供給公社ゲハーク(GEHAG)に就職し、その主任建築家として、またシャロッテンブルク工科大学(現ベルリン工科大学)教授として活躍した。ベルリンを去る1933年までの間に12,000戸の勤労者住宅をベルリンに建設している。

社会主義建築家として認められるようになったタウトは、台頭してきたナチス政権に睨まれることとなった。そこで、1933年にかねてより憧れていた日本にやってくる。しかし当時、ナチス政権と組んでいた日本では公職につけなかった。日本では高崎の少林山達磨寺内の「洗心亭」に伴侶エリカと共に住んだ。建築設計活動が出来ないところから、「建築家の休日」と称し著作活動に徹し、一方工芸の指導に携わった。エリカは正妻ではないが有能な人物でベルリンの主要建築物を設計したカール・フリードリッヒ・シンケル(Karl Friedrich Schinkel, 1781年～1841年)の血が流れていると言う説もある。タ

図2　ベルリンのブルーノ・タウトの伴侶エリカの墓

ウトの言葉を速記したり、タウトのメモを清書したりまた他人との交渉に長けていたと言われる。

「日本美の再発見」「日本・タウトの日記」「日本文化私観」などを著し、桂離宮や伊勢神宮を初めとする日本人が気付かなかった日本建築の素晴らしさを世界に紹介した。一方、権力を嫌い、権威主義的な日光東照宮、西本願寺に移築されたという説のある飛雲閣などを批判している。日本滞在中はユダヤ人説が流されたり、特高に付き纏われたり必ずしも安泰なものではなかった。

日本で良い職が無かった所にトルコから大学教授の口がかかり、1936年10月にトルコへ伴侶エリカと共に去る。しかしトルコに渡って間もなく1938年12月24日に当地で客死した。タウトの死後、伴侶エリカはタウトのデスマスクと日本の著名人との交換書簡を持って高崎の達磨寺に現れた。ここで1周忌法要が営まれ、エリカは日本を去り、上海、モスクワ経由ドイツへ帰国したと言われるが行方は分からないとされていた。

しかし今回の調査で、ベルリン市の墓地管理局の協力によりエリカの墓がベルリン市内のブリッツのジードリングの近くの霊園に存在する事が判明し、参拝する事ができた。Erica Tautと墓標には記され、ブルーノ・タウトの名前もある(図2)。ただし、彼の納骨はされておらず、単なるメモリアルである。ブルーノ・タウトの墓は客死したイスタンブールにある。

1. Gartenstadt Falkenberg (田園都市ファルケンベルク)

- **面積**　住宅団地面積4.4ha，緩衝帯面積6.7ha，総面積11.1ha
- **建設年**　1913年～1916年
- **所在地**　Berlin Grünau,Akatienhof 1-26,Gartenstadtweg15　66,68　72,7499
- **共同設計者**　Heinrich Tessenow, Ludwig Lesser(庭園建築技師)
- **規模**　129住戸、その内48棟は集合住宅タイプ、タウンハウスタイプ81戸(77戸は集合住宅タイプ、二家族住宅が2棟)
- **所有者**　ベルリン建築・住宅共同組合(Berliner Bau und Wohnungsgenossenschaft)
- **建設期間**　第1期工事1913年　第2期工事1914年～1915年　第3期工事1915年～1916年
- **発注者**　公益建築組合大ベルリン郊外田園都市有限会社(Gemeinnützige Baugenossenschaft Gartenvorstadt Groβ Berlin GmbH)
- **変更**　1991年～2002年に記念建築物保護法により修復工事実施

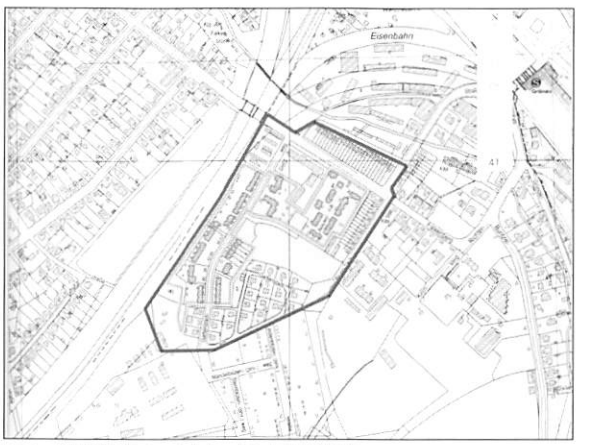

図3　田園都市ファルケンベルク配置図[1)]

第一次世界大戦前の作品である。場所は旧東ベルリンで、シェーネフェルド(Schönefeld)空港に比較的近い場所である。配置図を図3、住宅の一部を図4、図5、図6に示す。当時「生活共同体(Genossenschaft)」という事が言われ、その組合による団地ジードルング(Siedlung)計画である。ベルリンのような大都市に居住する人々に単に健康的な住居を提供するだけではなく、都市生活の改革「田園都市」を造ろうとしたものである。特に階級の差の無いような生活を求め、住民がここで農作業や手工業を行い相互扶助の活動もあった。1912年、タウト32歳の時の仕事で、当初7,500人規模のジードルングを描いていた。

しかし第一次世界大戦の勃発により、1916年までに2つの住区が完成したのみであった。扉や窓、外壁には豊かな色彩が施され、共同体の生活を活気あるものにさせた。1991年～2002年に記念建築物保護法により修復工事が実施され、タウトの初期の色彩がよみがえっている。

図4　田園都市ファルケンベルクの特徴的な壁を持つ住宅

図5　田園都市ファルケンベルクの住宅の特徴的な壁

図6　田園都市ファルケンベルクの住宅の一つ

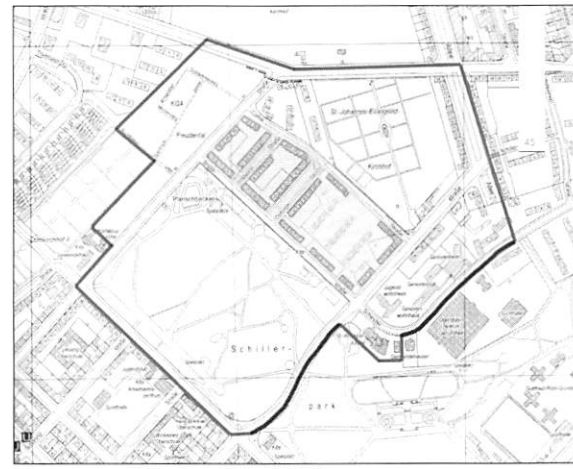

図7　シラー公園の住宅団地配置図[1)]

2．Siedlung Schillerpark（シラー公園の住宅団地）

・**面積**　住宅団地面積4.4ha，緩衝帯面積6.7ha，総面積11.1ha
・**建設年**　1924年～1930年
・**所在地**　Berlin Wedding, Britolstraβe, Dubliner Straβe, Corker Straβe, Barfusstraβe
・**共同設計者**　Franz Hoffmann
・**規模**　33戸の集合住宅タイプ
・**所有者**　ベルリン建築・住宅共同組合(Berliner Bau und Wohnungsgenossenschaft)
・**建設期間**　第1期工事1924年～1926年　第2期工事1927年～1928年　第3期工事1929年～1930年
・**発注者**　ベルリン建築貯蓄組合(Berliner Bau und Sparverein)
・**変更**　1951年にBristolstraβe 1の修復を弟のマックス・タウト(Max Taut)が実施、1953年～1959年にハンス・ホフマン(Hans Hoffmann)が拡張工事を実施、1991年以降記念建築物保護法により修復工事実施

タウト44歳のときの作品である。配置図を図7、住宅の一部を図8、図9、図10に示す。ヴェディング(Wedding)のシラー公園(Schillerpark)にあり、1914年にベルリン建築貯蓄組合(Berliner Bau und Sparverein)が新しい大規模ジードルングを建設しようとして土地を調達していた。しかし第一次世界大戦が勃発し、建設は大戦直後の1927年になった。ドイツで大インフレーションが起こった年である。ファルケンベルクで実績のあったタウトに設計依頼があり、タウトは喜んでこれを引き受けた。都会にありながら田園調を出すように心がけ、隣棟間隔を開け、各住戸の採光を配慮しまた通風にも配慮した。各住戸は同じ形態ではなく収入層により、住戸面積を変えるなどの試みを行なった。これは「新しい建築文化」、「新しい国民住宅」という言葉も作られ、広まった。現在では当たり前であるが厨房と浴室の分離も行なった。

図8　シラー公園の住宅団地、道路から見た住宅の一つ

図9　シラー公園の住宅団地、中庭側から見た住宅の一つ

図10　シラー公園の住宅団地、中庭の様子

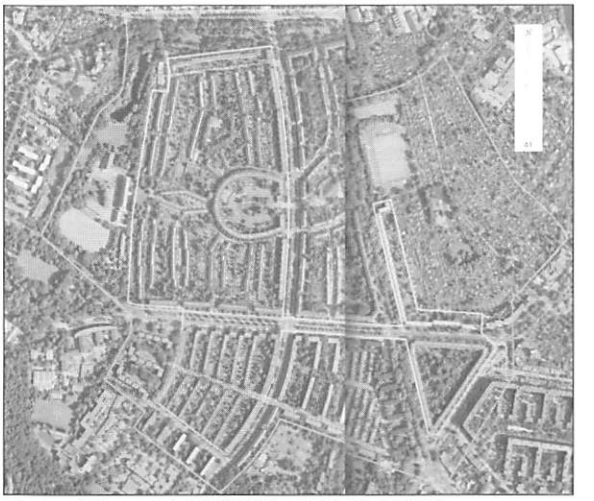

図11　ブリッツの大規模住宅団地航空写真と配置[1)]

3．Grossiedlung Britz（Hufeisensiedlung）（ブリッツの大規模住宅団地）（馬蹄形住宅）

- **面積**　住宅団地面積37.1ha，緩衝帯面積73.1ha，総面積110.2ha
- **建設年**　1925年～1930年
- **所在地**　Berlin Britz,Akazienwäldchen an der Blaschkoallee,Fritz Reuterallee, Parchimer Allee, Buschkrugallee
- **共同設計者**　Martin Wagner（第1期～第2期工事）、Leberecht Migge（造園建築家）
- **規模**　1,963戸の住宅（79%）。その内1,556戸は集合住宅タイプ407戸（21%）のタウンハウスタイプ
- **所有者**　公益住宅貯蓄建築組合（GEHAG）
- **建設期間**　第1期工事1925年～1926年　第2期工事1926年～1927年　第3期，第4期工事1927年～1928年、第5期工事1928年～1929年　第6期工事1929年～1930年
- **発注者**　公益住宅貯蓄建築組合（GEHAG）
- **変更**　1960年～1970年代に修繕工事実施、1980年代より記念建築物保護法により修復工事実施

タウト45歳のときの作品で建築家マルチン・ヴァグナー（Martin Wagner）との共同作品である。図11に航空写真、図12、図13、図14に住宅の一部を示す。ヴァイマール共和国時代にジードルングが多く作られるが、この時代に建設されたドイツ初の大規模ジードルングである。馬蹄形の集合住宅を取り囲み放射状に長方形の集合住宅が並んでいる。馬蹄形の中は芝生が植えられ、植樹もされている。中央には池まで存在する。社会主義者ヴァグナーが主導したと言われ、労働組合、協同組合の社会主義的集合住宅を公益住宅貯蓄建築組合（GEHAG）に建設させたと言われている。放射状に建設された長方形の集合住宅は小豆色に彩色されたものが多い。これは当時の住宅は鋳鉄製暖炉もしくはカッヘルオーフェン（Kachelofen）と呼ばれる陶製暖炉で暖房される場合が多く、建物は煙突からの煤で汚れたそうである。この汚れを目立たないようにタウトは住宅に彩色を施したと

図 12　ブリッツの大規模住宅団地、道路から見た馬蹄形住宅

図 13　ブリッツの大規模住宅団地、中庭から見た馬蹄形住宅

図 15　ブリッツの大規模住宅団地にあるタウトの顕彰碑

図 14　ブリッツの大規模住宅団地、馬蹄形住宅の周囲の住宅

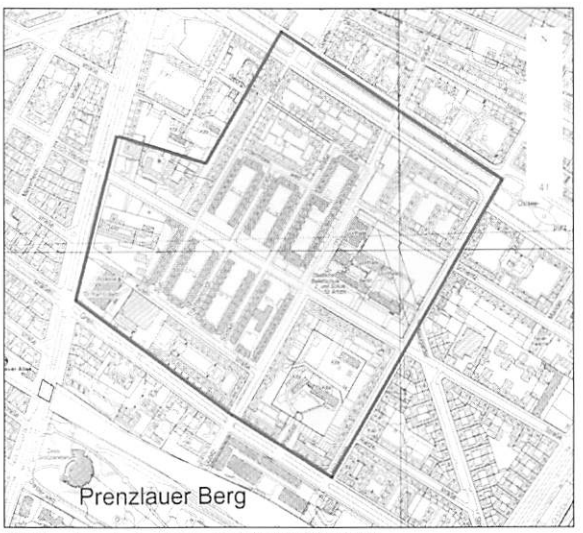

図 16　カール・レギエンの住宅都市配置図[1)]

言われている。この敷地内に図15のようにタウトを顕彰する石碑がおかれている。

4．Wohnstadt Carl Legien（カール・レギエンの住宅都市）

- **面積**　住宅団地面積8.4ha，緩衝帯面積25.5ha，総面積33.9ha
- **建設年**　1928年～1930年
- **所在地**　Berlin Prenzlauer Berg,Erich Weinert Str., Gubitz und Sültstraβe
- **共同設計者**　Franz Hillinger
- **規模**　1,145戸の集合住宅タイプ
- **所有者**　バウベコン不動産（BauBeCon）
- **建設期間**　第１期工事～第３期工事
- **発注者**　公益住宅貯蓄建築組合（GEHAG）
- **変更**　1995年以降記念建築物保護法により修復工事実施

タウト48歳の時の作品である。配置図を図16、住宅の一部を図17、図18、図19に示す。ベルリン市の内部にあり大規模なジードルングである。高密度な集合住宅で、高層化を計った。それでいて圧迫感を押さえ、通風や採光に配慮が払われた。中庭を大切にし、中庭からの眺め、色彩、形態に配慮した。道路側の形態は比較的簡素である。中庭には植栽が行なわれ、大都市に居住しながらなにか田園生活を楽しむ雰囲気を醸し出している。1960年～1970年代に修繕工事実施、1980年代より記念建築物保護法により修復工事実施し、漆喰塗り工事、塗装工事が行われ、内部の修復も行なわれた。

図 17　カール・レギエンの住宅都市、道路から見た住宅

図 18　カール・レギエンの住宅都市、特徴的なカーブを持つバルコニー

図 19　カール・レギエンの住宅都市、中庭部分

図 20　ダーレビッツにあるタウトの旧自邸（タウト設計）

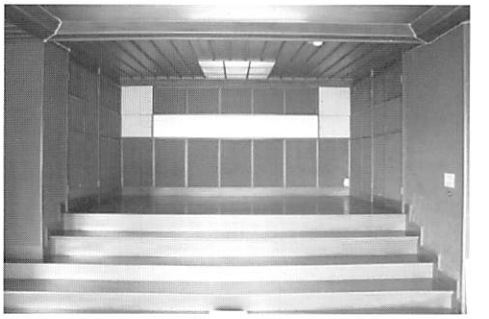

図 21　熱海にある旧日向別邸

おわりに

ベルリンの南約25 km の所にダーレビッツ(Dahlewitz)という村があり、タウトが日本に来るまで住んでいた自らが設計した住宅がある(図20参照)。タウトの設計した個人住宅は少なく大変貴重なものである。しかし1920年代の設計である事から損傷も激しい。この保存運動を行なってきたが、やっとブランデンブルグ州が修復の予算を認めた。

また、タウトの日本に残る唯一の作品は熱海の旧日向別邸があり、これも損傷が激しい(図21参照)。最近では日本とドイツのタウト研究グループの交流も始まっている。ドイツ側からは旧日向別邸の修復に期待がかけられている。

謝辞

この調査にはお茶の水女子大学大学院生安達香里氏（住居学専攻）に同行していただき調査の協力をしていただいた。現地ではアクセル・ヤーン(Axel Jahn)氏、ゲルト・ゾビッカート(Gerd Sowitzkat)氏、マンフレッド・ボヤシェブスキー(Manfred Bojaschewsky)氏らの協力を得た。平成20年度科学研究費補助金(課題番号20700575)、財団法人鹿島学術振興財団からの2007年度研究助成を頂いた事を記して謝意を表す。

＜参考文献＞

1）Winfried Brenne: Siedlungen der Berliner Moderne: Verlagshaus Braun (Juni 2007)
2）田中辰明：ブルーノ・タウトの業績と旧宅の保存事業：月刊建築仕上技術：工文社(2007／11)
3）田中辰明：朽ちかけるタウトの家：日本経済新聞朝刊文化欄(2008／7／17) 40面
4）田中辰明：独タウト邸保存・恩返しの訴え：東京新聞朝刊(2008／10／2) 28面
5）田中辰明，平山禎久，柚本玲：ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の作品と建築設備の変遷：空気調和・衛生工学会論文集：No.136(2008) p.1-5
6）柚本玲，平山禎久，田中辰明：ブルーノ・タウトが設計した住宅の暖房設備に関する調査研究：2008年度日本建築学会学術講演会：(2008／9／19) p.1327-1328
7）田中辰明，柚本玲：ブルーノ・タウトがベルリンで設計した集合住宅：日本家政学会第59回大会(2007／5)
8）Winfried Brenne:Bruno Taut. Meister des farbigen Bauens (Taschenbuch), Verlagshaus Braun；Auflage:1 (2005／5)
9）Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3.August 1980 "Bruno Taut" (1980)
10）ワタリウム美術館（編纂）：ブルーノ・タウト_桂離宮とユートピア建築：オクターブ(2007／05)
11）田中辰明：建築家マックス・タウトの業績と生涯：月刊建築仕上技術：工文社(2008／11)